

未 開 へ の 旅

——メアリ・ウルストンクラフトの『スウェーデン、ノルウェイそしてデンマークでの短い滞在中に書かれた手紙』——

細 川 美 苗

イギリス最初のフェミニストで教育者として名高い Mary Wollstonecraft は、1759年ロンドンで生まれた。1792年に出版された *A Vindication of the Rights of Woman* (『女性の権利の擁護』) でフェミニストとして名を馳せ、18世紀終盤イギリスにおける女性の行動規範を大きく逸脱する破天荒な生涯は、世間が大きく注目する人物であった。本稿が注目する *Letters Written During a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark* (『スウェーデン、ノルウェイそしてデンマークでの短い滞在中に書かれた手紙』、以降『北欧便り』) は、生まれたばかりの娘と召使を一人連れて北欧を旅する女性が、「あなた」に充てて書いた手紙で構成された旅行記である。「あなた」とされる人物はウルストンクラフトが当時結婚していたと装っていた愛人 Gilbert Imlay であるが、実際に『北欧便り』中にイムレイの名前が出てくることはない。不実な恋人イムレイの妻として北欧を旅行するウルストンクラフトが、彼の心を取り戻そうとして書き続ける手紙であるが、結局二人の関係は修復されることはなかった。『北欧便り』は旅行中にウルストンクラフトがイムレイに送った手紙を元に、帰国後再編されたものである。『北欧便り』には手紙の受けてからの返事は紹介されず、不実な恋人に対する女性の複雑な内面が独白で表現されている。この書き物の大きな特徴は、見捨てられた孤独な女性の内面の表現が、当時のイギリス人にとっては未開の土地であった北欧の自然描写と調和していることだ。また、筆者が北欧の文化社会や政治に言及する姿勢は、文明から非文明を見下ろす視点でありつつも、女性的な部分を残しており興味深い。感情をつぶさに綴

る感傷的な語りと北欧の自然や文化を紹介する旅行記という要素に加え、革命思想やフェミニズム思想を表した著者による北欧の経済、政治状況についての分析が含まれているという点で、異色の書き物だといえる。

個人の手紙を出版するという事は、現代の感覚からすれば非常識なことのようだが、当時は普通のことであり、実際にやり取りされたものでなくとも、そのような体裁を取る出版物は少なくなかった。全体が手紙であるという設定の小説出版は、「1780～1789年には空前の年18冊平均であり、1788年には34冊、1789年には26冊という高い記録がある。1790年代はおよそ年15冊である」(Mary Favret 222)。それにしても、現実的な状況を隠した上とはいえ、実は結婚していなかった相手に対してこれほどの愛情や不満をぶつける手紙を公にすることは大胆なことである¹⁾。またフェミニズム思想家や教育者として知られるウルストンクラフトの書き物の中でも、私情を包み隠さず綴った『北欧便り』は彼女の内面をはかり知るうえで貴重な資料である。彼女は自分の記述について「少しばかり不公平で全てのもを偏見に満ちた目で見ているかもしれない。だって私は惨めなんだから。そしてそう感じるべき理由もあるんだから」(XXI 178)と臆面もなく述べ、彼女の旅行記が主観的記述であることを隠しはしない。

ウルストンクラフトの手紙の受け手であるイムレイは、アメリカ、ニュージャージー出身の土地投機家とも冒険家とも言われる人物で、1793年革命最中のパリでウルストンクラフトと出会った。前年ウルストンクラフトは妻帯者である画家 Henry Fuseli に思いを寄せるものの報われることなく、傷心のうちに一人渡仏した。ウルストンクラフトはフランス国王ルイ18世の処刑や、そ

1) 『北欧便り』出版当時、ウルストンクラフトはイムレイと結婚していると考えられていたが、後にウィリアム・ゴドウィンと結婚したため、実は未婚の母であったことが明らかになる。この際ウルストンクラフトの元を去る友人も多かったことから、当時未婚の母となるのがどれほど衝撃的な出来事であったかがうかがえる。さらにゴドウィンはウルストンクラフトとイムレイの関係の詳細をウルストンクラフトの死後に出版した回顧録に記した。これもまた大きなスキャンダルとなった。

れに続く恐怖政治を経験し、*An Historical and Moral View of the Origin and Progress of the French Revolution* (1794) (以降『フランス革命』) を執筆していた。

1793年2月1日にフランスが英国に宣戦布告し、8月には英国艦隊がトゥーロン (Toulon) のフランス要塞を破った。このニュースはすぐにパリへと広がり、在仏イギリス人は政治的迫害を受けることとなる。イギリス人が次々と拘束されてゆく中、恋人関係にあったウルストンクラフトを守るために、イムレイはアメリカ大使館に彼女を自分の妻として登録した。多くのイギリス人が国外へ逃れたが、ウルストンクラフトはアメリカ人としてフランスに留まった。しかし後にウルストンクラフトがイギリス思想家の William Godwin と結婚した際にスキャンダルとなるように、二人は実は結婚していなかった。ウルストンクラフトは妊娠し、1794年5月に婚外子 Fanny (Frances) を出産する。

その頃イムレイはイギリスの対仏包囲を破り、食料や石鹼、鉄などを中立国からフランスへ輸入する計画に加わっていた。彼と仲間がスウェーデンへと運び出す許可を得ていた銀塊で支払いが行われるはずであった。この計画が首尾よく運んだならば、イムレイとウルストンクラフトはアメリカへ向かい、農場を経営する約束をしていた。イムレイはノルウェイ人船長ペーダー・エルフセン (Peder Ellefsen) を雇い、彼の名義でフランスの積荷船を購入し、ノルウェイ船籍とし、イギリスの対仏包囲をすり抜けるためにデンマークの国旗を掲げて航行した。船は3,500ポンドの価値になる銀塊を乗せて、フランスの港町ル・アーブルを出港した。イエーテボリ (Gothenburg) で、イムレイの仲間エリアス・バックメン (Ellias Backmen) がその船を待っていた。

残念ながらエルフセン船長は、ノルウェイに入るなり船の所有権を彼の家族に移行し、小さな港を次々と隠れて回った。フランスに居たイムレイは8月末にはこの裏切りを確信し、行方不明となった投資について関係者と話し合うべくル・アーブルから単身ロンドンへ渡った。この後1795年4月に、イムレイの帰りを待ちきれないウルストンクラフトがイギリスに乗り込むまで、二人が

会うことはない。その間ウルストンクラフトは、たびたびフランスへ戻る約束をしながらも、それを果たさないイムレイに苛立ちながら、一人子育てをした。生まれただけの子と異国にとり残され孤独と不安感を抱えたウルストンクラフトは、イムレイが自分と娘の待つ家庭よりも、ロンドンでのビジネスを優先させることを非難する手紙を送り続けた。大きな財産を失いかけているイムレイにとって、ウルストンクラフトの再三にわたる要求は重荷となっただろう。彼の心はウルストンクラフトから急速に遠のいていった。一方生まれただけの娘を抱えたウルストンクラフトは、経済的にも精神的にもイムレイに頼るしかなかった。ウルストンクラフトは、かつて『女権の擁護』において厳しく批判していた男性への依存を深めてゆく。

イムレイとの離別に耐えられないウルストンクラフトは、1795年4月9日にとうとうイギリスへ渡った。イムレイは母娘とともに暮らし始めるものの、ウルストンクラフトとの関係は改善されず家を出てしまう。当時のウルストンクラフトは知らないものの、後のゴドウィンの伝記によれば、イムレイはこの時すでに若い女優と関係を持っていた。イムレイとは実際結婚していなかった後ろめたさからか、ウルストンクラフトはロンドンの友人達から遠ざかっており、一人絶望感を味わった。1795年5月末、ファニーが1歳になる頃、ウルストンクラフトはついに自殺を図るがイムレイが間一髪命を救う。

二人の関係を何とか打開したいイムレイは、ウルストンクラフトに妻として北欧へ向かい、彼の船についての交渉を進めることを依頼する。イムレイは帰路にハンブルグで待ち合わせる提案さえした。6月、ウルストンクラフトはこれを引き受け、娘とフランスから連れてきた召使を連れてスカンジナビアに向けて出航するためにハルへ向い、そこで良い風を待った。彼女は最初から旅行記を執筆するつもりであり、William Coxeの *Voyages and Travels* を携行した。旅行中には、出版業を営む友人から頼まれたマノン・ローランド (Manon Roland) の獄中記の英訳も進めるつもりであった。ハル滞在中もウルストンクラフトは毎日イムレイに手紙を書き、彼にもそうするよう要求した。スカンジ

ナビアでの彼女の使命は、法的なプロセスを促すかエルフセンと和解することだった。

『女権の擁護』においては、感情に対して理性の重要性を説き、小説 *Mary: A Fiction* (『メアリ』) においては、男女の精神的なつながりを模索したウルストンクラフトの書き物は、いまや変化の時を迎えていた。天上の世界で相手と結ばれることを理想の愛の形とする『メアリ』で表明された理論は覆され、神聖な愛は「この頃のウルストンクラフトの手紙においては」地上的なものを意味していた」と Janet Todd は述べている (Life 309)。『北欧便り』では、かつての理性的な理論家であったウルストンクラフトは影を潜め、恋人に見捨てられた事実を受け入れることのできない女性が、娘と共に北方の荒々しい土地を旅する悲哀を書き綴っている。ウルストンクラフトはそのような自分の姿をメランコリーに満ちた一人旅の女性として劇化することに成功した。トッドも言うように『北欧便り』を含むウルストンクラフトの手紙は現代の視点から読むと全般的に感情過多で自己陶醉が過ぎるようであるが、そのような表現は当時の流行であった (Letters 22)。破局を迎えた現実の関係においてはもはや聞き入れられない呼びかけを想像的な形で相手に投げかけることによって、ウルストンクラフトは精神的な安らぎを得ていたのだろう。『北欧便り』は「あなた」と呼ばれる手紙の受け手に対して愛情を示し、かつての愛を思い出すようにと懇願し、相手の不実を嘆き攻撃している。

ナポレオン戦争期を除いて、裕福なイギリス人がイタリアやフランス、ライン河畔など比較的南方にあるヨーロッパの国々へ旅行することは珍しくなく、旅行記も存在していた。しかしバルト諸国はたいてい商用か政治的な訪問に留まるものであった (トッド Life 315)。女性が商用で旅することは稀であり、さらに一人で北欧へ向かうことは驚くべきことであった。ようやく1歳になったばかりの娘を連れたウルストンクラフトの旅は、11日間に渡って荒波に耐えることから始まった。ノルウェイのアーレンダール (Arendal) かスウェーデンのイエーテボリに到着する予定であったが、風が悪くどちらの町も通過

してしまった。スウェーデンの最寄りの陸地に到着したウルストンクラフトは2晩休み、バックメンに会うためにイエーテボリへ向けて出発した。町に到着した一行は、バックメン家に招待された。ウルストンクラフトは暇を見つけてはイムレイに手紙を書いたが、自分が望むほど返事が来ないことに苛立った。「ウルストンクラフトはイムレイを『悩ませる』ことを止めることはできなかった。彼女はいつも受け取るよりも多くの手紙を期待していた」(トッド Life 320)。ウルストンクラフトの手紙は、自分の価値について述べ立て、自分の愛に報いないイムレイを責め、彼の不実やくだらない放蕩を好む性癖を非難していた。

イエーテボリは中立国である利点を生かして、戦争中に商業で大きな利益を上げた都市であった。家庭的愛情よりも金銭に執着するイムレイへの個人的反感と商業主義への批判を重ね、ウルストンクラフトは戦争で経済的な利益を得ている中立国の商業都市の状況をおおむね否定的に描いている。「有利な交易から来る勤労を伴わない富の流入が、その所有者たちを『野蛮化』している」と、ウルストンクラフトは評している(『北欧便り』XXIII 191, トッド Life 321)。これは個人的経験から生ずる意見と政治的な判断が一致する点で、彼女が行う社会批判の好例である。

続いてバックメンと共にノルウェイ国境に近いストレームスタード(Stromstad)へ馬車で向かった。人がほとんど住んでいない地帯であり、追いはぎの心配すらないほどだった(トッド Life 323)。イムレイからはほとんど手紙が届かず、各休息場で書かれるウルストンクラフトの手紙は自殺を仄めかすような調子で、彼女自身は「もうすぐ死ぬであろうと確信していた」(トッド Life 323)。4日目の朝にストレームスタードへたどり着いた。

次の目的地はノルウェイのテンスベル(Tønsberg)だが、危険を承知で海路をとることにした。召使とファニーをイエーテボリのバックメンのもとに引き返させ、ウルストンクラフトは一人で船出した。

テンスベルでウルストンクラフトは市長と面会した。彼女が身を寄せた家で

は英語が話せる者が居らず、市長も多忙であったため、ウルストンクラフトは一人で過ごすことが多かった。娘ファニーを手放したことも加わり、彼女は一層内省的になった。『メアリ』においては、死後の世界の永遠性を求めたウルストンクラフトであったが、この頃になると「特に聖書的な神への信仰を持たずに精神的な熱望を理解するという18世紀的な宗教の世俗化」に加担する考えを示し始めていた(トッド Life 329)。これは後のロマン主義詩人の自然崇拜によって加速される思想である。『北欧便り』の後に書かれ死後出版されるウルストンクラフトの小説*The Wrongs of Woman: Maria* (『マライア』)においては、天上的な幸福に救いを求めるという考えは全く見られなくなる。

引き続きイムレイに手紙を書き続けるものの、7月の終わりに1ヶ月前に書かれた手紙を受け取るだけで、それ以上の返事はなかった。この頃になってウルストンクラフトは、イムレイが浮気ではなく特定の女性と関係をもっているのではないかと疑い始める。音信不通のイムレイを激しく責める手紙を送った当日、バックメンから5通の手紙の束を受け取った。ウルストンクラフトは後悔するも手遅れであった。イムレイの手紙には、はっきりなしに届くウルストンクラフトの手紙が彼を苦しめていると書いてあった。テンスベルでの仕事は思ったほど成果を生まず、ウルストンクラフトはイムレイの弁護士と会うためにラルビク(Larvik)へ引き返した。

ラルビクで弁護士と面会した後、ウルストンクラフトはリソル(Risør)を通過し、テンスベルへ向かった。8月も終盤に向かう頃、さらに北上し首都オスロ(Oslo)へ発った。そこから帰路につき、ストレームスタードを経由し、8月の終わりにはイェーテボリで娘と再会した。喜びもつかの間、イムレイからは冷たい手紙を受け取った。その手紙でイムレイは「父親としての責任を受け入れた。子供のために、その母親には優しく接するつもりだと言うものの、彼女[ウルストンクラフト]には互いの気持ちがすれ違っていることが見て取れた」(トッド Life 340)。

ウルストンクラフトはひどく落ち込んだが、帰国後旅行記を書くために北欧

諸国についての観察を続けた。『フランス革命』ではフランスの状況を客観的に記述したウルストンクラフトだったが、スカンジナビアについても同じように書き記すことは難しかったと認めている（トッド Life 341）。ウルストンクラフトはバーンストフ（Bernstorff）伯爵に会うために、娘と共にコペンハーゲンに向かった。海を渡りデンマークに入り、エルシノアから馬車を使った。バーンストフ伯爵はエルフセンと法廷外で和解をするように勧めた。ウルストンクラフトは和解するか決着へ向かうかのためにできる限りのことを終えハンブルグへ向かった。ウルストンクラフトはまだそこでイムレイと再会するという夢を捨てていなかった。

ハンブルグでウルストンクラフトはイムレイに最後の手紙を送るようにとせがみ、待ち続けた。ウルストンクラフトにとって大工業都市ハンブルグはイムレイの商業主義を体現する場所だった。近郊のアルトナ（Altona）では、「付近で生産される糊のにおいが空気を汚していた。その環境のせいでウルストンクラフトは、商業がどれほど人の審美眼を偏向させ、美を損なうかという問題に目を向けた」（トッド Life 347-8）。ついに愛情どころか、友情の片鱗さえも見えない手紙がイムレイから届いた。彼女はハンブルグでの再会をあきらめた。希望を失ったウルストンクラフトは文筆で娘を支えるしかないことを受け入れ、帰国して北欧旅行記を執筆する決意を新たにした。

ウルストンクラフトの旅行が法的または商業的に何か利益をもたらしたかどうかは、明確な証拠が残っておらず不明である。失った船はバックメンの手元に戻ったようだが、積荷であった銀塊の行方についての手がかりは残されていない（トッド Life 350）。

10月上旬、一行はドーヴァーへ到着した。もちろんイムレイの姿はなかった。ウルストンクラフトはロンドンへ向かい、そこでイムレイは母娘のために住居を用意した。ウルストンクラフトはイムレイが雇った料理係の女を問い詰め、イムレイが他の女性と暮らしていることを知った。彼女の絶望はファニーを養うという使命感を上回り、再度自殺を決意する。当時多くの人は自殺を罪

であると考えていたが、ゴドウィンや Thomas Paine などの急進的思想家は一定の条件でそれを容認していた。また当時流行していた感傷的な文学は個人主義思想と融合して、『若きウェルテルの悩み』におけるような自殺する主人公への共感を生み出していた。ウルストンクラフトと全く同じように、ウェルテルは「秀でた感受性について多弁に語った後、自身の命を絶ったのである」（トッド Life 354）。

ひどく雨の降る夜、1時間以上も歩き続けて衣服の重量を増し水没する準備を整え、ウルストンクラフトはロンドンの Putney 橋から身を投げた。すぐには沈まなかったため衣服を身体に押し付けて沈もうとしたが、難しかったようだ。意識を失い流れているウルストンクラフトは助けられ、蘇生された。彼女は友人のクリスティー一家のもとへ預けられたが、イムレイが彼女を見舞うことはなかった。ウルストンクラフトは苦い経験を出版し生計を立てようと、自分が送った手紙を返すようにイムレイに頼んだ。イムレイは手紙を返還し、恋人と共にパリへ発った。

1795年冬には、ウルストンクラフトは『北欧便り』の準備を始めた。*Analytical Review* のために彼女が書いた書評は、多くの旅行記や Laurence Sterne の感傷的な旅行小説の模倣作品を選んでいる。自分の手紙がイムレイという一人の男さえも誘惑することができなかったことを全く無視して、それらの手紙で読者を誘惑しようとするウルストンクラフトの発想は天才的であるとトッドは評している (Life 367)。以前は理性の重要性を説いたウルストンクラフトだったが、『北欧便り』においては個人的、感情的な描写を多用するようになった。彼女は手紙で「内的な現実を表現していることについて自意識的であり…受け手を楽しませたり手紙が与える効果などを考慮せずありのままの感情を表現することに興味があった」（トッド Letters 8-9）。1798年、Wordsworth らによる *Lyrical Ballads* の出版に端を発するとされるロマン主義時代は目前に迫っており、ウルストンクラフトの表現の変化は時代の流れに沿うものであるといえる。「女性の書き物においては特により自伝的である風潮」（トッド Life 367）

があり、『北欧便り』と同年に出版される Mary Hays の小説 *Memoirs of Emma Courtney* (『エマ・コートニーの回顧録』) は、筆者の体験の小説家であるばかりでなく、実際にやり取りされたラヴ・レターが小説にそのまま転用されている。ヘイズはウルストンクラフトの友人である。ウルストンクラフトの旅行記における私生活暴露の程度は、ヘイズのものと比べると多少控えめである。彼女が北欧旅行の際に請け負った任務やイムレイの名前、彼との関係の詳細は伏せたまま、北欧の風景や風習、寂しい旅行者の内面を「あなた」宛ての手紙に書き綴るに留めている。

実際ウルストンクラフトはイムレイの心変わりに目を瞑り、夫、父親、愛人としての理想的なイムレイの姿をあきらめることができなかつたが、『北欧便り』でイムレイと想像される手紙の受け取り手は非情な人物である。その一方でウルストンクラフトの分身である語り手は、見捨てられた母親という文学的には慣例的で、読者の同情を受けて温かく受け入れられるべき位置を占めている。女性がその行動規範を逸脱した場合は読者の反感を買うものだが、母親であることは悪評の防御となりえたのだ(トッド *Life* 368)。Eleanor Ty も家族のために従事する母性に反映される女性像が、性欲や利己主義にといったものの対極としてイメージされるという理由から、トッドと同様の意見を述べている(*History* 79)。孤独に北欧を旅する女の絶望に、子供への愛情や失われた家庭生活についてのメロドラマを加え、「ウルストンクラフトはその自画においてルソーが『孤独な散歩者の夢想』で非常に力強く表現した孤独の主題を活用した」(トッド *Life* 368)。このような語り手である自身についての表現とは対照的に、巧みな筆致で手紙の受け手である男性を「冷たく、無神経な男」として構築することによって、ウルストンクラフトは手紙の書き手に対する読者の同情を首尾よく得ていると平倉は評価している。もはやイムレイが戻ってくることはないと感じたウルストンクラフトは、二人が結婚していない事実が公になる前に自分について生じる悪評を予見し防御策を講じたのかもしれない。当時美德の同義ともみなされた感傷性と母性的イメージを活用した本作品

は、ウルストンクラフトが書いたもののなかで当時最も温かい評価を受けた。流行中であった感傷的な語り口と政治や経済、進化などについての男性的洞察力とを巧みに調和させた『北欧便り』は、1796年に出版され多くの人を魅了した。その中には、翌年夫となるゴドウィンもいた。後にウルストンクラフトと結婚し娘をもうけた彼が書いたウルストンクラフトの回顧録、*Memoirs of the Author of a Vindication of the Rights of Woman* には『北欧便り』についてあまりにも有名な以下の一節が残されている。「もし男がその著者と恋仲になるようにと企まれた本があるとしたら、私はこれこそがその本だと思う」(249)。

『北欧便り』はそれまでのウルストンクラフトの政治的な書き物とは一線を画すものであるかのようなのだが、エリザベス・A・ボールズは『北欧便り』をウルストンクラフトの初期政治思想や理性主義、特に Edmund Burke への反論と同じコンテキストで理解するべきだと主張している。当時流行していたピクチャレスク美学に基づいた人工造園に表現されるような、視界から労働者や作物を排除して築き上げるエリートの特権と結びついた美ではなく、労働や生産、利益、肉体と結びついた美をウルストンクラフトが追求しているからだ。貴族階級やその代表としてのマリー・アントワネットへのバークの同情を批判したのと同じく、ウルストンクラフトは特権階級的な美は静的で、非生産的に造園された風景であり、知覚主体からは離れた遠景である点を批判しているのだ。ウルストンクラフトの描く風景は、人の気配がする耕された農地や労働者の姿であり、知覚主体である語り手はその風景の中に居る。ウルストンクラフトは波の音、衣服をぬらす雨、腐ってゆくニシンが異臭を放つ野原を描写し、風景は五感を刺激する環境である点を強調する。美的な快は、景色を離れて眺めるものではなく、そこに居る者が五感で感じとるものであり、新鮮な空気、自然の中の散歩といった行為と結びつき、主体の運動、労働、健康や肉体的な強靱さとなる。ウルストンクラフトは最終的にはそれを最も肉体的な感覚である「性的な快と結び合わせるのである」(ボールズ 243)。外界について主体が感じたことを描くにあたっては、当時流行していた感傷的レトリックは有効で

あった。感傷的表現は「研ぎ澄まされた洞察力、敏感な感情、過剰な自意識、物思いに沈んだ内省」を特徴としており、主体の得た感覚について饒舌に語ることを可能にすると Syndy McMillen Conger は論じている (159)。

Mitzi Myers は Patricia Meyer Spacks の研究²⁾ を援用し、「一般的に女性による自伝は男性によるものに比べて、体系的ではなく秩序だててはいない」と述べ、女性の自伝が一貫した個人の歴史を記述するよりは、アイデンティティーを模索する過程の記録である場合が多いとしている。マイヤーズは『北欧便り』にもこの傾向を読み取り、詩人の魂の成長の記録とも考えられるロマン派詩人による伝記との関連を指摘している (168)。その上で旅行記が進むにつれて筆者自身の精神も変化すると評価している。コンガーも『北欧便り』にて孤独にさ迷うヒロインの姿を、George Gordon Byron を一躍時の詩人へ祭り上げた“Child Harold’s Pilgrimage”の主人公へと続くものだと指摘している (195)。ウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』で掲げた理性主義を脱し、到来しつつあるロマン主義的な思考を始めていたといえる。

Lawrence Kennard も『北欧便り』の特徴として“writing-in-process”という点を挙げている (60)。これは『北欧便り』がアイデンティティーを模索する過程の記録だとするマイヤーズの指摘と趣旨を共にする。それぞれの手紙が完結した自己またはアイデンティティーを提示するのではなく、常にどこか(何か)へ向かう通過点であることは、彼女の手紙が「決して最後の言葉をいい終わった事はないようだ」というトッドの指摘とも符合する (Letters 7)。ウルストンクラフトの「手紙は意味ありげな沈黙で閉じ、数時間後にはまた彼女は筆をとるのだ」(Letters 8)。ケナードは『北欧便り』及びその前後に書かれた『女権の擁護』とエッセイ「詩について」をあわせて論じ、ウルストンクラフトが詩的言語の改革を試みていたと述べ、『北欧便り』を「詩的散文」(65)という新しいジャンルであると評価する。その試みは「原始的な言語上の変化」

2) Spacks, Patricia Meyer. “Female Identity.” *Imagining a Self: Autobiography and Novel in the Eighteenth-Century England*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1976. 57-91.

(56)であり、ロマン主義詩人の詩的言語改革を先取りしていると述べている。ケナードの言う原始的とは、詩的言語の技巧性を嫌い、見たままの自然と、それが観察者の内面に引き起こした感覚をそのまま言語に写し取ろうとする試みである。この結果、作品全体は自然とそれに対峙する作者の内面についての描写となり、筆者の心の成長の過程を模写していると考えられるのだ。詩と散文、外界と内面、旅行記と手紙というような、2項を自由に行き来する点が『北欧便り』の特徴であり、その語りが革新的である点は多くの批評家によって指摘されており、独創的である点は疑いがない(コンガー 145 タイ History 70 ケナード 65)。

『北欧便り』は出版物としての公共性をもちつつも、私的な手紙であり、客観的な北欧についての旅行記であると共に、それに反応する筆者の内面が書き綴られている。筆者といっても安定した語り手ではなく、未開の土地を旅する帝国主義的視点、恋人を思う女性、母親など様々な位置から手紙は書かれている。ウルストンクラフトは多様な視点を取る私的な思索と人類の進化や幸福についての論評を独特のスタイルで統括しており、彼女の旅は「現実的でありながら精神的なものであり、彼女は社会及び個人的な幸福について定義しようとしている」のである(マイヤーズ 175)。このような指摘は、ボールズの評価と関連しているといえよう。つまり、社会的な幸福は現実離れた抽象的人間による思索から定義されるのではなく、五感をもった個人の経験と共に模索されるものなのだ。

マイヤーズは『北欧便り』に見られる上記の特徴を、ウルストンクラフトの想像力の力による2極の融合と評価している。しかし、ウルストンクラフトの想像力は現実世界を改良する力となるというよりは、そこから逃避する手段であり、最終的には理性による解決がかなわない苦境を忘れる手段である。

Let me catch pleasure on the wing—I may be melancholy to-morrow. Now all my nerves keep time with the melody of nature. Ah! let me be happy whilst I

can. The tear starts as I think of it. O must fly from thought, and find refuge from sorrow in a strong imagination — the only solace for a feeing heart. Phantoms of bliss! ideal forms of excellence! again enclose me in your magic circle, and wipe clear from my remembrance the disappointments which render the sympathy painful, which experience rather increases than damps; by giving the indulgence of feeling the sanction of reason. (X 128-9)

上記の引用において先ずウルストンクラフトは、明日には憂鬱な気分になるかもしれないけれども、精神が自然との調和状態にある今だけは楽しませてほしいと願う。強い想像力により心配事を忘れ、悲しみからの避難場所を見つけることのみが、感じる心を持つものにとっての慰めであると述べている。祝福や美德などに呼びかけるものの、それらは幻影 (phantoms) や物陰 (forms) でしかない。そのような実体なきものに向かい、自分を魔法円の中に閉じ込めてくれと頼む。そのような場所で感情へ耽溺することによって、実生活における苦境を忘れることができるのだ。しかし、ウルストンクラフトが明日にも憂鬱になるかもしれないと予言しているように、逃避により辛い現実を変化させることはできない。想像力が創り出す理想的世界に留まり続けることはできず、語り手は一時忘我の中で過ごすものの、常に憂鬱な現実へ戻り孤独な旅を続けるほかない。このような想像力の限界は、続くロマン派主義詩人たちの苦悩として想像力の暗い側面を形成してゆく³⁾

旅を進めるにつれ、ウルストンクラフトの想像力が限界を露呈し始めるのみならず、これまで理想的であるとみなしていたものの価値さえも疑わしいものへと変化してゆく。ウルストンクラフトはイムレイの財産を奪回し、二人でアメリカへ渡り生活をするつもりであった。新大陸で隠遁した牧歌的家庭生活を送ることを夢見ていたウルストンクラフトであったが、当時のイギリスからすれば未開の土地である北欧を旅行するにつれ、田舎暮らしがそれほど魅力的でないということに気づく。

Still nothing so soon wearies out the feelings as unmarked simplicity. I am, therefore, half convinced, that I could not live very comfortably exiled from the countries where mankind are so much further advanced in knowledge, imperfect as it is, and unsatisfactory to the thinking mind....My thoughts fly from this wilderness to the polished circles of the world, till I recollect its vices and follies, I bury myself in the woods, but find it necessary to emerge again, that I may not lose sight of the wisdom and virtue which exalts my nature. (IX 122)

牧歌的黄金時代の比喩で表される田舎暮らし、墮落した都市生活の対極としてイメージされる非文明への憧れが覚めてしまうのだ。

さらにウルストンクラフトは女性に対する見方も修正する。

Wollstonecraft's earlier attitude about such women [misguided woman of sensibility], excepting a few instances of fleeting compassion, generally range from mild disdain to anger; the stories she weaves around them suggest that their mistaken notions of sensibility render them unfit physically socially, and intellectually, turning them into invalids, muddle-headed ninnies, or voluptuaries, and inept daughters, sisters, mothers, or friends. While her tales

3) 例えばキーツの *La Belle Dame Sans Mercy* では、想像力から甘美な経験をするものの、その中に永遠に留まることはできない人間の姿が書かれている。素晴らしい理想世界を体験した騎士は、現実世界へもどると幽霊のようにさ迷うほかない。想像力は理想世界を見せてくれるものの、現実を変化させる力には乏しく、高い理想を掲げる芸術家の苦悩となる。タイは、ウルストンクラフトの想像力は現実世界からの逃避の手段である点は認めているが、それをワーズワースの『序曲』と比較して、ロマン派的な想像力というよりも、18世紀に流行した感受性への傾倒に近いものだと指摘している。キーツの *Negative Capability* などを、脱個性、他人であるかのように感ずる能力とすれば、ロマン派的想像力のなかにも18世紀的感受性の延長と考えられる点を見出すことができるかもしれない。感受性が18世紀にたどった推移、および感受性とロマン派的想像力の関係は、今後の研究課題としたい。

frequently depict women duped into such condition, as narrator she always maintain some distance from them, as if *she*, a disciple of education and reason, cannot imagine herself in the situation of these victims of miseducation — or no education — at the mercy of every fancy and feeling, hence often victimized by men. (コンガー 156-57)

上記の引用でコンガーも指摘しているように、かつてのウルストンクラフトは感傷小説の影響により強い感受性を持つようになるものの正しい教育を受けていないために墮落してゆく女性たちとは距離を置いていた。そして自分がそのような状態に陥ることはないと考えているかのような立場で彼女たちを啓蒙しようとしていた。しかしイムレイの言葉を信じ娘までもうけながらも去ってゆく彼を引き止める術のないウルストンクラフトは、今や犠牲者としての女性の中に自分を置いている。『北欧便り』においてウルストンクラフトは、スターンの『センチメンタル・ジャーニー』に登場する女性、男に見捨てられて正気を失ったマライアに自分を重ねている (VIII 111)。さらに、若くしてクリスチャン7世の妻になり、後に王付きの医者と不倫関係に陥り身を滅ぼしたマチルダ女王にも同情を寄せている (XVIII 166)。

『北欧便り』にはイムレイの書物から受けた影響も見られる。彼は『北米西部地誌』(1792)というアメリカの地理、気候、自然をヨーロッパに紹介する書物と、『移住者たち』(1793)という小説を書いている。どちらも、『北欧便り』同様書簡体で、アメリカとヨーロッパの間を渡る手紙群で構成されている。『北米西部地誌』は単なる客観的、科学的な地理紹介ではなく、イムレイの「主観的、印象的な記述に流れる傾向」(大井 50)があり、時には理想化されたアメリカの姿をたたえ感激する内面が描かれている。これは旅行記であるウルストンクラフトの『北欧便り』が、彼女の内面描写へと随時移行してゆく点と類似している。

『移住者たち』は小説ということもあり、さらにロマンティックに理想化さ

れたアメリカの生活が描かれている。その小説に描かれる「アメリカの風景は『アルカディア』や『パラダイス』を連想させる牧歌的な空間」(大井 64)であり、墮落したヨーロッパの生活からの「避難所」という役割を果たしている。イムレイが善人であると信じたウルストンクラフトは、このような以前のイムレイの書き物に類似した文章を、無意識的であったにしても、彼に宛てて書くことにより、彼がアメリカへ渡り素朴で理想的な生活を営もうと共に誓った約束を思い出し、本来の姿を取り戻すことを願ったのかもしれない。商業に没頭することにより生来の善性を失ったかのようなイムレイに、ウルストンクラフトは本来の彼に戻るようにと懇願する。

But you will say that I am growing bitter, perhaps, personal. Ah! shall I whisper to you — that you — yourself, are strangely altered, since you have entered deeply into commerce...Nature has given you talents, which lie dormant, or are wasted in ignoble pursuits — You will rouse yourself, and shake off the vile dust that obscure you. (XXIII 191)

Nancy Yousef は『北欧便り』においてウルストンクラフトが独特の女性主体理論を打ち出していると評価している。ルソーやワーズワースのような男性作家が示す自立した主体ではなく、人との繋がりを求めて止まない主体が『北欧便り』には描かれているというのだ。自然の中を一人散策することにより理想的自我を見出す男性主体に対し、自然の中をさ迷うウルストンクラフトは死の恐怖を味わう。ボートで海に漕ぎ出したウルストンクラフトは以下のような瞑想に陥る。

I cannot bear to think of being no more — of losing myself — though existence is often but a painful consciousness of misery; nay, it appears to me impossible that I should cease to exist, or that this active, restless spirit,

equally alive to joy and sorrow, should only be organized dust. (VIII 112)

自然との一体感の中で充足した自我の高まりを味わう男性主体とは対照的に、ウルストンクラフトにとって自然との対峙は死の恐怖へと発展する。現実的な憂き目を忘れさせてくれるはずの広大な自然の中を孤独にさ迷うことが最終的には死の恐怖となるならば、孤独感、人との繋がりが絶たれているという認識が恐ろしいのだといえる。

ウルストンクラフトにとって人気のない自然や静寂は、無感覚と結びつき死の恐怖の源となるのだ。これは先に論じた美の概念についての論と重なっている。つまり人工的に労働、肉体、生産といった人間やその活動を連想させるものを排除した静的、エリートの風景美学に対する嫌悪感である。俗世と離れた自然の中に理想的自我を見出す男性的、特権階級的美学とそれに同調する男性主体とは反対に、ウルストンクラフトは自然の中の孤独、崇高感に浸る快を嫌悪し、世俗で生きることを選ぶのだ。人とのつながり、特に手紙の受け手とされるイムレイとの関係に見られるような人間関係は、心の痛むものであるが、それを受け入れていこうという認識に達する。ウルストンクラフトの手紙は、痛々しいイムレイとの関係を何とか継続していこうとする姿勢が強く見られる。彼との関係に嫌気がさし、そこに背を向け自然の中に慰めを見出すのではなく、執拗に手紙を書き返答を要求し続けている。

聞き手や読者との関係を求めるウルストンクラフトの姿をヨウゼフはこのようにまとめている。「[ルソー、ワーズワースに見られるような男性的エゴティズムと比較して] このエゴティズムの利己的な点は、もしそれが利己的であるとするならば、ちょうど他人に語りかけたいという欲望、信頼を勝ち得たいという欲望の中にある。逆説的にも、ウルストンクラフトの一人称の語りを正当化するやり方は、自律性を主張することではなく、[聞き手への] 依存の上に成立しているのだ」(557)。ヨウゼフの議論に加え、そもそも『北欧便り』が書簡体であること自体が、聞き手を前提としており、関係性を求める欲望はテ

キストの構造自体に内在しているといえる。

上述の批評家らが指摘しているように、ウルストンクラフトが『北欧便り』にて構築している語り手は続くロマン主義詩人たちが示す自我像と共通する部分を見出しているものの、自然の中での充足した孤高の自我よりは、世俗に身を置くほうを最終的には選択する点において独自性があると評価できる。これはロマン派時代における女性独特の自我を検証する原点となりうる。ウルストンクラフトはイムレイとの関係を通して、それまで未知であった自分の一側面を見出した。感情におぼれ墮落するおろかな女性たちを見下す指導者としての男性的な視点ではなく、彼女たちの中に身をおき、神との関係ではなく人とのつながり、人からの承認を求める自我である。北欧という未開の土地への旅は、ウルストンクラフトにとっては新たなアイデンティティー模索の旅だったのだ。ウルストンクラフトの新しい自我認識はそれまでの彼女を支えた、『女性の権利の擁護』に示されるような高踏的理論ではなく、一般読者に好意的に受け入れられるテキストを生み出すことを可能にした。また『北欧便り』においてウルストンクラフトが用いる戦略、つまり母性や感傷的な語り口を武器に、従来なら反面教師とされる主人公の愛情の顛末を理想的なものとして示した手腕は高く評価されるべきだ。男の不実により見捨てられた女性が惨めで不幸な人生ではなく、その感受性と思索の力によって共感を得る道を開いたのだから。

参 考 文 献

- 大井浩二 『手紙の中のアメリカ』 英宝社 1996。
- ボールズ・エリザベス・A. 『美学とジェンダー—女性の旅行記と美の言説』 ありな書房 2004。
- Buss, Helen M., et al, eds. *Mary Wollstonecraft and Mary Shelley: Wiring Lives*. Waterloo, Ontario: Wilfrid UP, 2001.
- Conger, Syndy McMillen. *Mary Wollstonecraft and the Language of Sensibility*. London and Toronto: Associated University Presses, 1994.
- Favret, Mary A. *Romantic Correspondence: Women, Politics & the Fiction of Letters*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Godwin, William. *Memoirs of the Author of a Vindication of the Rights of Woman*. (1798) Holms

201-277.

- Hirakura, Natsuko. (平倉菜摘子) “From ‘I’ to ‘You’: Wollstonecraft’s Self-Dramatization in *Letters from Sweden*.” *Essays in English Romanticism* 31 (2007) : 1-10. (『イギリスロマン派研究』)
- Holms, Richard. *A Short Residence in Sweden, Norway and Denmark and Memoirs of the Author if “The Right of Woman”*. Harmondsworth : Penguin, 1987.
- Johnson, Claudia L. Ed., *The Cambridge Companion to Mary Wollstonecraft*. Cambridge : Cambridge UP, 2002.
- Kennard, Lawrence R. “Reveries of Reality : Mary Wollstonecraft’s Poetics of Sensibility.” *Buss* 55-68.
- Myers, Mitzi. “Mary Wollstonecraft’s *Letters Written...in Sweden* : Toward Romantic Autobiography.” *Studies in Eighteenth-Century Culture* 8 (1979) : 165-185.
- Todd, Janet. *Mary Wollstonecraft : A Revolutionary Life*. New York : Columbia UP, 2000. (Life)
- . “Mary Wollstonecraft’s Letters.” *Johnson* 7-23. (Letters)
- Ty, Eleanor. “‘The History of My Own Heart’ : Inscribing Self, Inscribing Desire in Wollstonecraft’s *Letters from Norway*.” *Buss* 69-84. (History)
- . “Writing as a Daughter : Autobiography in Wollstonecraft’s Travelogue.” *Essays on Life Writing : From Genre to Critical Practice*. Ed. Marlene Kader. Tronto : U of Tronto P, 1992. 61-77.
- Wollstonecraft, Mary. *Letters Written During a Short Residence in Sweden, Norway and Denmark*. (1796) Holms 59-197.
- Yousef, Nancy. “Wollstonecraft, Rousseau and the Revision of Romantic Subjectivity.” *Studies in Romanticism* 38 (1999) : 537-557.

* 本稿は 2005 年度松山大学特別研究助成の成果である。

* 英語表記は、初出は原文で示し以降日本語とし、英語以外の言語については、初出時に日本語と原語の両方を表記し以降日本語とした。